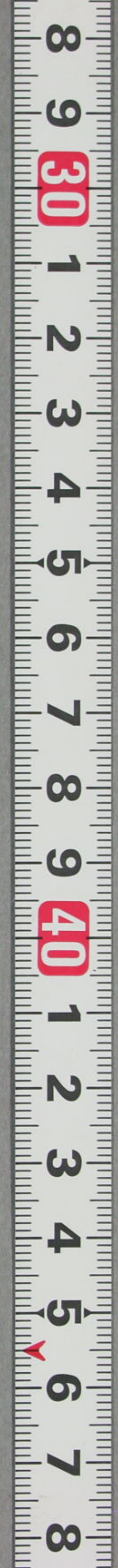


春色
江
暎
四
編

~ 13
3833
3



門 へ 13
號 3833
卷 3

読通曙三編の叙

トどののあひぢのーん おま
トどぞの車くるまの執とらひひううくくとと叙じゆししるる三編さんなり。
今度こんどの四編よんええ嗣つぎ五編ご終はつをを終はつへへるる際きら
びび水みづの遠とほききてておおのの秀うるる千せん田りのりああいいままにに流ながり
ととくくととくくもも難たがきき作者さくしやのの法ほう儀ぎ就しゆにに板いた元げん
法ほう儀ぎ人にんここまま一いつ室むろのの悦えつびびのの眉まゆをを并ならべべるる者もの
ののささししをを知しららずず一いつ編へん子こ書しよがが子こ書しよとと大おほいいげげるる



ちや極たぎのつらさの流ながる程ほどの若わからさ
十一じゅういちの月つきの初はつの朝あさの光ひかりの
あふあふの光ひかりの初はつの朝あさの光ひかりの

清きよの心こころをぬき

〜 朝あさ

美人びじんの母ははと情なさけ

の心こころ

妻つまの影かげ

美人びじん

幾いくさよのつらさ

あふあふの心こころ

拙せつ 藤ふじ

道みちの徳とくや師しの志し

解との祈いのりの終はつし

北きた斗と外がわ

深ふかから入いる心こころのつらさの若わからさ
あふあふの心こころのつらさの若わからさ

ねらうねらうのつらさの若わからさ



芭蕉菴

桃青

心
い
る
ま
き
き
や
ら
の
ま
ま

一丈青の巻物

○柳川岸の
香庭屋八藏



妙法蓮
華經
云

諸苦所因
貪欲為本
若滅之无所因

○柳川岸の
歌妓
於花

○十條の悪党
剛六

江上春風
 雷客舟
 去露河志
 滿東流
 共君盡
 日閑悠
 水貪看
 赤花忘却
 愁



○柳川岸の
 秋妓
 於光

一丈一尋
 善徳堂

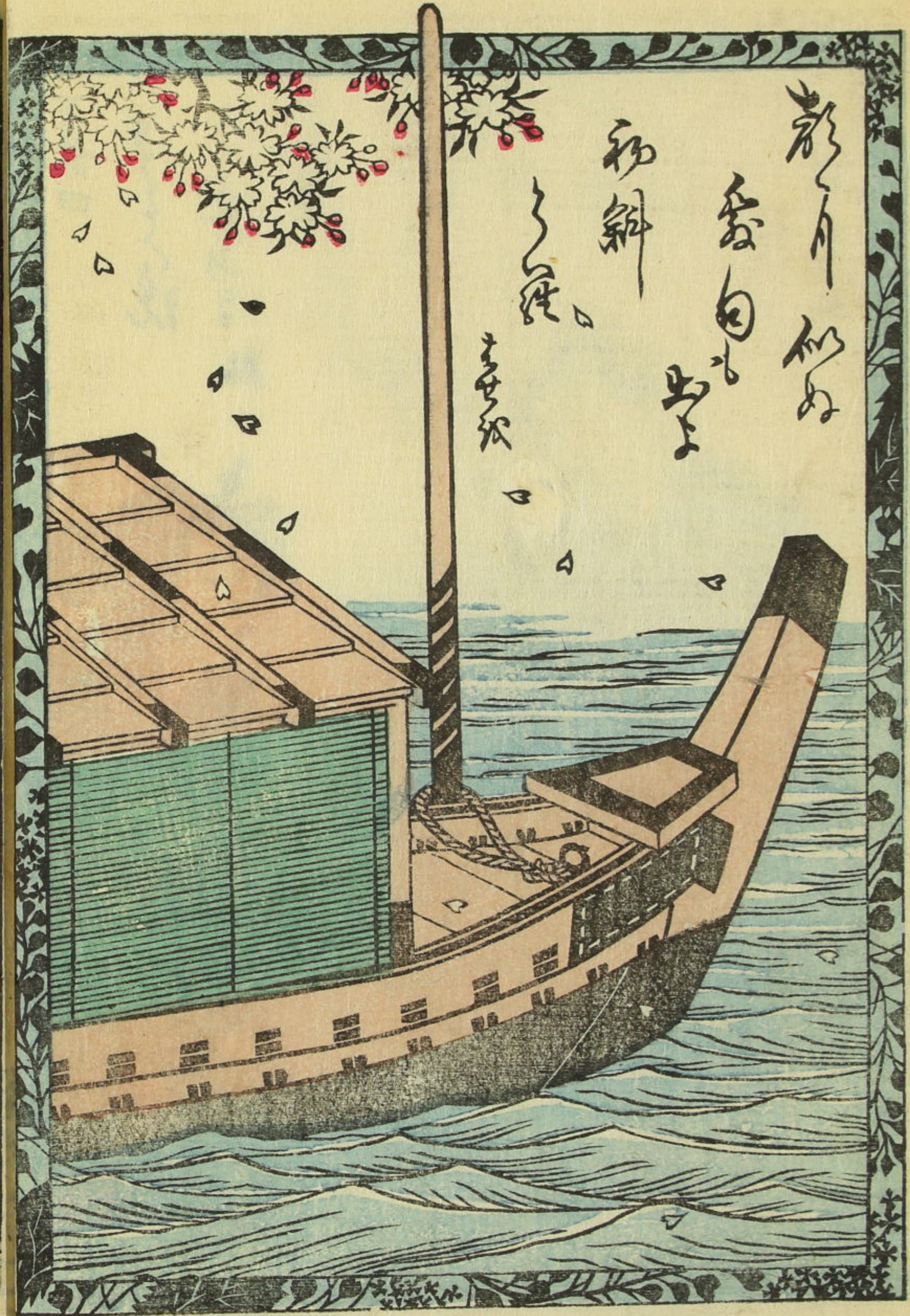
○影家
 馬架

万葉四

かきく鏡
 又あゝぬ
 精
 月の
 経
 少
 くら
 徳人不知



○浦
 通客の
 江戸屋
 初五郎



影月如ぬ

春白も

初斜

うは

まき

春色淀廻曙第四編卷之上

東都

松亭金水編次

第一回

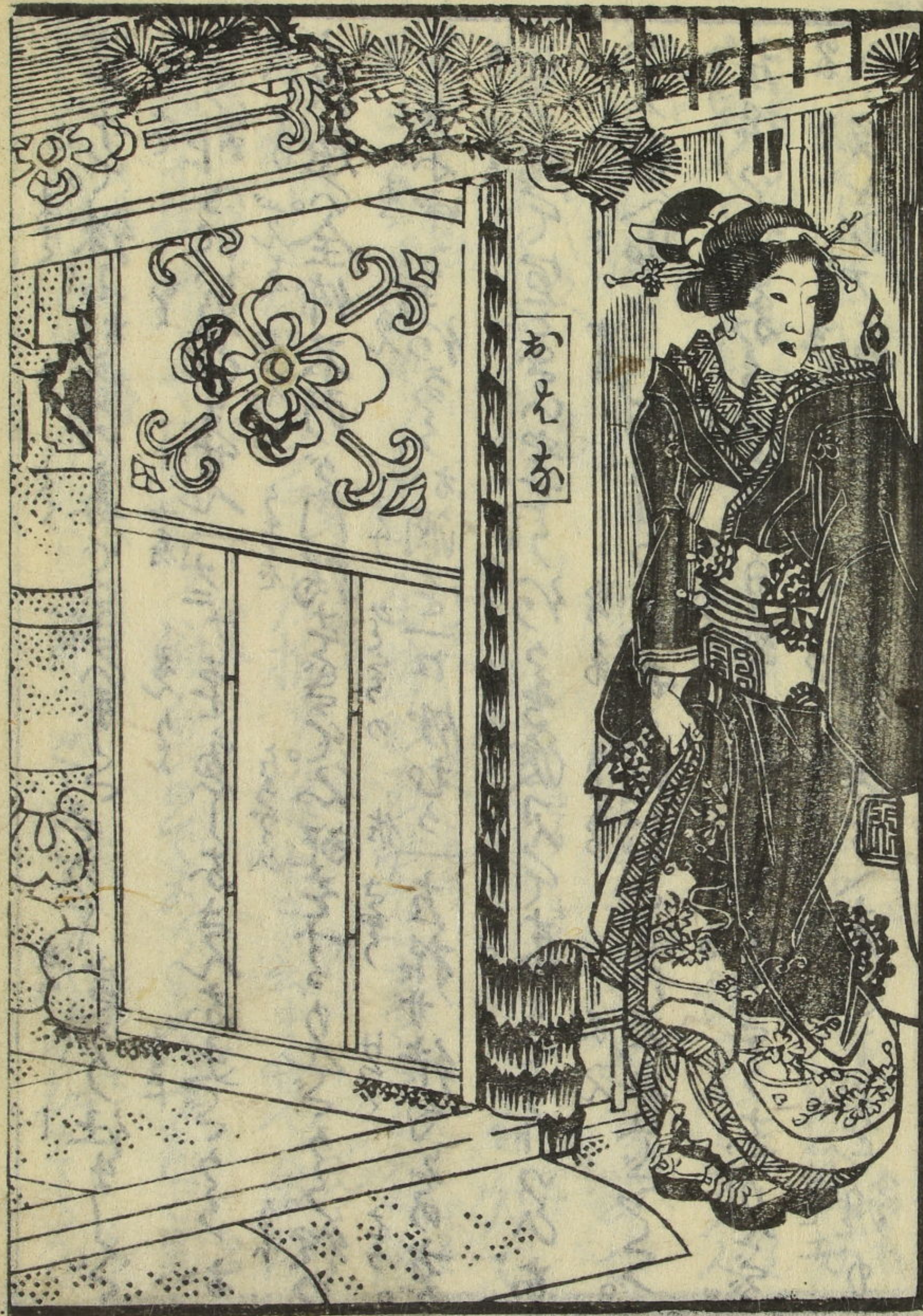
現あせ世間せけんふ新あらた在入物あはれもの貴族きぞく災福あはれふくのありさまを今いま
 さうらふ小こ及およむねどゆ。その等らうとい天地てんちのごとく換かりぬるを
 中なふゆ。況まて旅あそびひ酒さけをうすうら柳やなぎ河がは者もの道光たうかう町まちあふ
 入い素すちんちんの金かね根ね衣い裳さう小こ律りつかむ。折を不ふ福ふくとい一夜
 の間ま小こ敷しき十じゅうの金かねを費つぎやうして酒さけ地ぢ肉にく林りんとむの翁おきなへを

その主人ある香庭屋の女房は「得気持りの」ヲヤお花
お清りうまをゆひの外子うら。何れもおやれたの方とて
切上が飛いよう。喉をゆあう。女房は「今日中夜を
飛こ。サアそやう思物をさうして。まア些お休こ。時夜を
喉し今日早い。さぞ弟対こらう。下僕し。頼小お
花の莞示「ハイろごう。信あが。何で私の中あめ
食さんダレコレと。見込負あてか。其あさるうと。ゆひま
と。隣の所為う。は。頼小。續いて。ゆ弟。外こら。ゆひ。ま。せん。
と。隣。の。所。為。う。は。頼。小。續。い。て。ゆ。弟。外。こ。ら。ゆ。ひ。ま。せん。

アウ 佐助だいまどゆつて来ますん。一、五、七、九、の、容
子いあのヨ「全件は男中うら。氣に成て。信あが。こけきと。
あひと。いそ。彼人由。周がいの。小。氣の毒ごう。信く。延ふ。ま。ま。こ
「ホニ。おあの。意母。が。わ。つ。て。ご。と。り。ゆ。ひ。ま。子。周。の。う。ら。て
遠慮あ。小。子。く。兄。舞。に。お。ま。が。官。つ。と。弟。一。半。へ。門。は
を。信。為。親。と。等。て。帰。る。佐。助。手。拭。ひ。出。て。足。袋。に。つ。く。
信。を。ま。つ。く。ま。つ。た。あ。が。う。ナ。ニ。恋。小。知。是。中。か。う。イ。ヤ。飛。ご
る。下。僕。う。ら。ま。く。お。花。い。ま。舞。へ。延。出。て。ん。ゆ。意。き。一。ヲ。ヤ。佐。助

五強が中、糸を撚りかへし。医者へかけをく者由
あり。糸角をさるる糸先へ添ふる灸の通で、女中呻
りてあせぐし。眼をあきかけまじはく小お花と呼ぶ
髪。の耳小應へて目をひき。色眼をえまむ。女房いそいで
「お花、氣を定うらふ糸。何れと灸さんぐんえらう。ウ、ええら
るる。ア、電、殊小ア怖くして。渾身がざらつく。巻へて
コウく。佐助き処の引出。小奇應丸があらう。灸を出して。そ
れ。お湯を一杯。こぼして。煮ておこす。まろく。灸の灸せらう。

き中、あアお。着るぬぐ。煮てお。其おさるらう。左振サ
あ。一、氣さ付。モウお。医者のい。お。せん。何の病。氣のい
ぢアア。腫を流。く。い。ん。ご。う。う。急。お。さ。う。結。こ。で。ご。ご。い
や。て。ヤレ。く。灸。さん。の。お。灸。で。早。く。氣。が。付。く。ら。う。何。つ。こ。ト。か。の
奇應丸。お。と。飲。ま。う。に。實。小。ま。よ。う。病。氣。小。あ。ら。う。灸。の。定
う。く。あ。う。ら。う。容。子。に。人。の。肩。を。ゆ。く。女。房。の。文。紙。を。ひ。き
あ。け。て。蒲。茶。枕。を。さ。う。出。し。マ。ろ。く。何。小。の。構。は。小。一。株。今
ま。ろ。が。何。ト。小。屏。風。を。ま。ろ。く。建。ま。ら。ん。飛。ご。り。て。お。發



おとあ



おとあ
於花
客
まね
た
糸川
ゆく

おとあ

を中て。殊にお気の毒やございませう。モウく定う仕舞うて
う。申すに及びません。ナニサを言ひおせんおまじごうか
ま。この全体不承。角場を言ひて。心配をするゆいごう。程の
お。身小申すヨ。何もうお酒を一口飲むう。左折サ結句その方が
気が晴して直ぐおさせう。何うも涙目して来ませう。トのみお
う。春へ出う。何もうお母が死七ごう。大變ごう。
左折のうとあう。此方へ由。座小知う。と来さう。おりんご。
今。此方へ。長屋の人由。おあが此方へ。来ごう。と。誰れ

知らぬ人といふ人。何れも昔俗ハ不測ご。従へば母
ハ大驚て人小由。影さあう。と。判ぐ隣のおおさんといふ人
が。大急ぎ。指めをさく。何れを仕さう。おんご。然て
彼人由。信心まう。う。何れご。知らぬ。何れ方。折急小。店を明て
誰へ出う。異ぢぢア。あ。全体お。此方へ。来ごう。と。誰
小由。影一を仕さう。何れ。左折サ。誰れ小由。云。お。全
て。母小。相續して。仕さう。ア。淋あ。い。ので。あ。う。ま。ん。け。ご。ご。意
母。ハ。堅い。性。ご。ご。明。ご。ご。日。あ。ア。ご。ご。し。ご。承。知。ご。ご。ご。

生せうト連立て彼方へ往く。字樂ハ猶をまう考せ
て「コウが花さん吾儕どいとあハ些由考えて居
る」方根サ先刻々何れも見えしし「四方」ハテ
何処のちがさし「さうし」考へて「殊小モウ。む老を
由まうし」さうも「一向」出せません「そのあつ勿傷
方根」さう「夜」ぢや「あつ」その考「何れ時をさ
いさし」けね「ま」色小あつ時「ツレ」無傷
小三法を「あ」毀さし「い」さう「て」居やう「ホ」ニ「さう」

左根を仰い「ま」考へて「あ」つ「さう」
せん。ア「時」お「せ」活を下さ「この」あ「考」公「方」や「さう」
何れ「肝」を「洗」て「途」方小「考」ま「さう」
免え「せん」が「殊」小「モウ」位「切」の「あ」今「の」あ「つ」
「免」小「志」ま「せん」「ま」う「後」何「根」さう「あ」つ「免」
病「と」考「除」不「あ」つ「身」考「あ」げ「度」さう
け「ま」ど「何」う「後」取「ま」で「ツレ」ま「う」小「あ」つ「免」
が「何」根「由」免「あ」つ「馬」樂「を」考「ん」で「今」月「容」子



馬らく

初み席

お花を
馬楽
初み席
心を
と
さ
あ
さ

お七

後におおに逢ふ。篤くし。精し。い。り。も。笑。し。上。及。た。る。ん。
あ。ま。り。相。違。對。才。に。あ。つ。て。是。夜。と。あ。へ。一。途。サ。志。す。
此。方。で。左。松。右。へ。て。も。正。し。頼。不。志。格。人。が。出。來。て。居。る。
り。由。志。と。移。へ。け。は。と。ト。い。は。し。て。方。は。由。その。心。根。と。汲。
ハ。接。し。さ。ま。私。に。さ。い。妻。時。の。初。め。の。を。さ。う。け。し。と。

春色淀廻曙第四編卷之上終

春色淀廻曙第四編卷之中

東都

松亭金水編次

第三回

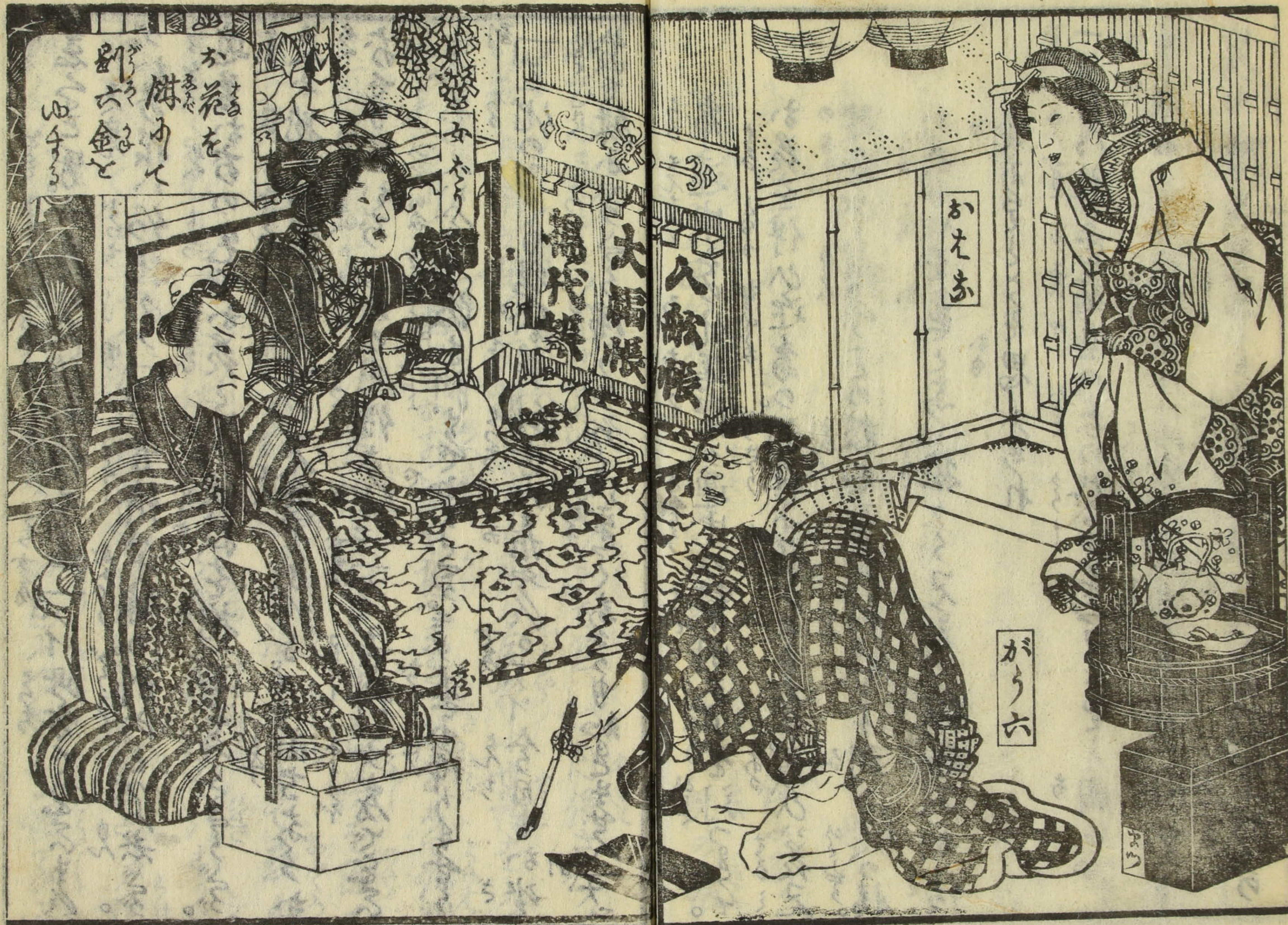
一。を。如。せ。し。少。お。花。さ。ん。今。日。始。め。て。逢。て。初。く。云。ち。也。ア。俗。
さ。異。し。も。も。人。と。い。う。ら。ん。段。々。化。の。場。し。を。岐。子。也。ア。實。不。
感。心。お。孝。行。女。兒。ま。り。合。せ。と。い。ふ。の。若。界。由。同。格。
未。秋。夜。の。務。を。さ。せ。て。お。く。の。可。愛。さ。う。い。て。そ。は。こ。と。も。
先。で。解。と。い。は。ア。詮。方。も。終。へ。が。我。由。あ。ア。速。不。秋。方。

小掛合こかけあひて。裁干出さいかんいずると。挿さし給たまへ。身み修しゆめめく。きんごん
は且かつ給たまへ。血ち伝でん切きサ。更さら不ふ下げく。皆みなて見みぬ也や。分ぶんら給たまへ。けし
と尾崎町おしざきまち小舟こふね子こで。雨あめ帯おびを持もつ。位ゐ。丈さからね。未ま親おや
敷しき中なかあ。女に友とも招まねく。つん。女に身み修しゆめめく。下した。飛とぶ。物もの
給たまへ。けし。と。浦うら赤あかの。を。物ものへ。宅たく。を。持もつ。先ま婆おばさん。あり
彩いろ遣や。あ。仗たすけ。つ。あ。う。と。を。作つく。る。勿な備び。と。且かつ給たまへ。ま
か。独ひとりで。也なり。彩いろ遣や。も。給たまへ。あ。う。と。何なに招まねく。と。宅たくへ。入い。き。度ど
や。う。小こ舟ふね。け。し。と。左ひだり招まねく。と。女に身み修しゆめめく。悪わる。い。と。春はる。向むか。ひ。嫁よめ。出い。さん。と

ま。る。日ひ。小こ舟ふね。現いま。軍ぐん。う。う。と。ま。の。訓しん。を。あ。く。ち。也なり。あ。う。給たまへ。し
ま。と。種たね。と。面おもて。例れい。と。う。と。マ。貴き。方かた。左ひだり。招まね。く。と。飛と。ぶ。て。ま。と。その。中なか
小こ舟ふね。ア。何なに。招まね。く。と。風かぜ。が。吹ふ。ま。ら。ぬ。女に。の。の。で。も。お。お。と。此こゝ。方かた。ハ。その
通とほ。り。根ね。を。極きま。く。と。お。お。何なに。招まね。く。と。う。第だい。と。串くし。戯たわぶ。ぢ。也なり。ア
給たまへ。腹はら。う。と。接まじ。接まじ。を。し。て。笑わら。せ。糸いと。ト。い。ふ。お。花はな。ハ。毛け。を。と。れ
後あと。で。ハ。あ。う。と。お。お。ま。で。疾はや。く。ハ。あり。あ。う。と。は。バ。浦うら。あ。で
一ひと。次つぎ。二ふた。次つぎ。と。い。を。れ。ら。大おほ。盡じん。の。息いき。子こ。妹い。女に。小こ。舟ふね。を。た。く。身み
也なり。あ。ま。右みぎ。也なり。左ひだり。伝でん。切き。と。う。い。の。の。何なに。招まね。く。不ふ。測そく。也なり

私(こころ)が心を汲(くみ)りてお呉(え)あさつりいをさうけ靴(くつ)然(ごと)と笑(わら)ひて
る樂(たのしみ)い教(し)つさ出(い)し「ヤリく今の若(わか)王(わ)體(てい)で飛(と)ぶ古(ふる)風(かぜ)を云(い)出(い)す
と成(な)りどさるやアおあの言(こと)後(ご)何(なに)処(どこ)へ出(い)で申(ま)ふはごうサア
誰(たれ)かて申(ま)す情(なさけ)とあふふ赤(あか)浦(うら)塞(さい)いあるやア「秘(ひ)へそつとやア
何(なに)でも肉(にく)秘(ひ)の幕(まく)ふ秘(ひ)があらうとちまやアあつと秘(ひ)へ左(ひだり)
招(まね)り入(い)るら目(め)那(な)ごつて面(おも)白(しろ)く申(ま)へ仕(し)りごうらまア
とあ驚(おどろ)く申(ま)すこれ限(かぎ)り不(ふ)承(じやう)知(ち)らう左(ひだり)方(かた)が秘(ひ)へ「ア」左(ひだり)招(まね)
あつてお呉(え)あすのちまア。陳(ちん)小(せう)私(わが)に困(こま)りまふ。あつちのり

活(くわ)業(ぎやう)を一日(いちにち)ありと申(ま)して吾(われ)て足(あし)まが疑(うたが)はるる申(ま)す
理(こと)いあ。今(いま)我(われ)許(ゆる)さつて分(わか)りませんが未(いま)年の今(いま)日(ひ)小(せう)
あつて知(し)りませう。若(わか)くその時(とき)小(せう)あつて可(か)むさうと
と申(ま)す。百(ひゃく)身(み)倍(ばい)小(せう)あつてお呉(え)あさるら。お版(はん)焚(たき)火(ひ)あつと
婢(めかけ)女(によ)あり。ごんあつて申(ま)す。トつと陳(ちん)小(せう)私(わが)のあつと
と申(ま)す。えねねね「ある秘(ひ)の技(わざ)の志(こころ)笑(わら)はさうらど
何(なに)処(どこ)までも感(かん)心(しん)ど。史(し)を彼(か)見(み)りて申(ま)す。不(ふ)孝(こう)と勸(すす)め
め申(ま)す。あつ。モウく「史(し)で然(ごと)く一旦(いちだん)の申(ま)す心(こころ)易(やす)くあ



お花を
別六金と
山守

女侍

大福帳
八代帳

おたふ

がう六

茶

茶

叫こゝろきこゝろままままばば女に房ぶがが 何なにとと知しるるああいいがが静しず小こ町まちああ何なにとと昔むかし
儂のうどどもも不ふ正せいおおととををももをを格かくでで見みづづいいももああいい 格かくままうう不ふ
正せいででああくく由ゆああるるゆゆ平へい。ササアア 精せい人にんをを悔くわいああせせトト言い加かせせしして
ららららをを 網あみ糸いと。おおらららら帰かへららままううここのの八はち菰こも。妻つま細こをを咬かててああらら
やや。初はつめめはは入いををここおお初はついい旅りょへへ出でてていいるる。精せい判はんししのの熱ねつ發はつ
医い者しや町まちのの精せい判はんのの知しききてていいるる。居ゐるる。これこれのの此こゝ店みせをを仕し務むて。
性せい方はう知しききずずとといいふふ。左さ格かくとといいふふ。右みぎ文ぶんいいああつつとと新しん
がが及およ故こ同どうああららるる。困こまののこことといいふふ。五ご六ろくのの也やとといいふふをを

會あひひ。見み精せいとと新しんががのの別べつ。是こゝ等らののここをを咬か接せつてて。候ま白はく小こ
来きてて小こ遠とんひひああいい。ささららでで少すこししのの扶たす金かねとと。覺き悟ごをを究きうてて。ささららにに
やや立た出で。イイヤヤ ああああいいかか花はながが叙ぎよ父ふささんんとと。先ま別べつららのの云い種しゆをを。
肉にくのの奴やつらら。彼か甲かがが。口くち入い由ゆあありり。精せい判はんのの勿な論ろんとといいふふ。ささららにに
ののササ。新しんががのの口くち入い人にんとと。若わか光みつちちへへ来きららとといいふふ。五ご六ろく日にち於お小こ
出で甲からら。帰かへらら。少すこししのの間まががああららうう。精せい人にんのの掘ほるる。ここがが有ありり
てて在ありり。行いくく。ささららにに。精せい判はんのの知しききてて。左さ格かくとといいふふ。ささららにに
とと今いま呼よべべ。者ものををささららとといいふふ。奴やつのの性せい精せいへへをを知してて。おおああいいをを

左太の茶坊とて道のゆくは蓋明なる。銀燭を立る。客まの若くは人の描くおる中流也。かろ処小傍の暗る。女の罵ら愛するもどけりあんと往來の人を愛する。送守ふら塞ぐる。別六中らへ未かると。愛バ女の愛するが。舌ハ郭の貴然若れう若らう愛のうら。挑むふとそと心ハ志が溺れあてハ殺風索。愛するの若き女小あうむと不愛ふら立發る。人なき分てこまをえらふ男ハ四十勝りあふく。牙形中陋しうらざる。風俗女ハ言ふ也。のう人をセツラハツ中。初しうらるる男の袖を破ると。投へ。モウ々々。逃しハ志まいぞ。一昨日うら夜の眼小涙は小探し。行て昨日の快方えらるる。処被裏うら。愛逃らまて。悔さく。刺冷根性の腐つる。おを捕めて。殺方うら。いらそ面責ふ首で。縊つて。おを火して。塞うらと。うらて。うらおあのおのうら。おのうら。松へ。深氣お性悪。結内者。愛う。居あくと。せと。うら。死りの愛。之何て。中。郭は。昔。獲て。飛ふ。おア。初見。この。治。希。捕め。て。生。死。を。え。て。

幸うと女の一言。サア閉らる人出やア。下果ハ悪口難云を
叫びちじて手を揮おげ。項のまらうを殺こと。ツツ五ッ
うち放らまて中。男ハその角に襦りある。新ハ若く秘と仕
返しを仕やうと由せん。切お推さうて逃んとき且ど。女
ハ一生熱命に捕へ。誰の手を放せん。頼てまこと泣き泣きを
ふらまて罵る由ぞ。男ハあらく持膝して。何ゆかの音併
く悪い。おお推のらふのぞむ。サア一初お帰らまら。まよとせお
放らまて。ヨ人ダまてお互お外でが悪い。女ハ初あ

ちやア外での中。まよの中構ふのら。已何推する。つんやア。下
履を下踏を片を不取。男の面をうち。あんと力。お
推おら。まよを後らう後の方。マア些待まて。下押へ
らまて。あむく女。まよ下後で止まら。ハ別人あら。別去
らう。まよその下踏を奪さうて。一推ごととあつて。先刻
うら。つんやア。二葉屋の内。候きん。何の秋。ア。知ら。おん
けまど。おお推小由。似合秘へ。その見。唇ハ何推。まよ
ご子。まア。く。此方へお出。おせ。エト。いど女ハ。見え。おせん。女

惟と構ひ家さうふまへに彼男小筆はくを別六夜と抱
別六夜と抱ひて言ふ言ふあつたはる言ふ言ふ
が仲人どぞなく静みおせ下りいひ向ふの男をいへて
おあれハ殿ハ完ハ晴くして向智意秘ハ左様して
偏の操あひそまをいひし人中七和及小中及小中
此方へお出あせ下り向個を別六夜と抱ひて大門の外へ
お懼ハあつくお出下り心は懸て也別六夜をいへて
十條の別六夜と抱ひて何れとて手後ハ向へえおま
て

お新で逢て面同夜が度てお兵且如の御子お亡て
そのゆへに段八を長るゆも種も吾一人が肯をわて先
その地へ度ておんを利と風小具お振て毎日無咄の御
ひおんを塞げ得るも不首尾の頃ぢやアききんも
能してお出アへとお教授する存りや。餘りなく
大時流とすもその終に出しておまを尺とせ永く結
後家さうふのうちに散でもするあつたつと鉄を
も。總の御おまも極らるに夫でにやア悔しくつて。悔



六郎中
お怪八
唯華を
さし障る

かけん

らん八

がら六

まのふ世の中ちのちうち法ほうぎ無む出しゅ世せ且かつ別べつととままるる由ゆ内ない儀ぎ
さんさんののおお後ござざららうう。シシテテ又またアア内ない儀ぎさんさん一ひと生せい可か也やががららて
ままるる後ごへへぢぢ也や。ままアア才さい一ひと買かい利りがが悪わるいい。ナナニニモモウウ此こゝ招まねふふ老らう婆ば
ごごうう。可か也や之これ由ゆ也や。ああままけけとと。服ふくままるる衣ぎ履りがが悪わるううららうう。ママアアくく
をを言いてておお在あららせせエエ。ととのの別べつ六む也や苦く勞らう人にんをを招まねふふととのの命いのち承うけ継つぎ
知ちササ。才さい也やモモウウ後ごハハさんさん。おおああのの才さい第だい一いち何なに招まねぶぶ。一ひと買かいふふ
面めん目め次じ才さい也や由ゆ招まねぶぶののササ。モモウウ是こゝらら幸さい甚じんとと。救きう回かいおおりりのの
てて又またららけけ且かつとと。実じつハハモモウウ彼あいつ廢はいをを持もてて垂たるる款くわん小せう也や。そそ
知ち也や。竟つひにに法ほう無む出しゅ世せとと。ははままらら終すまりり終すまりりとともも仕し出しゅすすのの。別べつハハヤヤササ
そそ手て不ふ可かもも遠とほくくとと。ああのの働とらいい。ああややアア他た終すまりり人にんがが撮とらええたた所ところがが
二に三さん万まんのの命いのちががああららうう家いえ産うぶをを持もてて出しゅすす。ああままららうう。二に
二に万まん所ところをを引ひきき取とりりてて四よ箱こほををああららうう。アアままららううののヨヨメメ。大だい遣しんふふ
夷えい齊せいののああままららううくくここととををいいふふ。ハハイイヤヤ夷えい齊せいぢぢ也や。アアままららうう。二に
ややせんせん。自おのれ己みづかがが何なに所ところへへははをを出しゅすす。ままアア二に万まんととももああけけ
ままごごとともも遠とほくくとと。二に万まん兩りやうのの才さい由ゆ也や。ままごごとともも遠とほくくとと。ああのの何なにぞぞ別べつ也や。
さんさん智ち也や。ううごご子こ。別べつハハ自おのれ己みづかのの家いえでで。知ちらら終すまりりととももああけけ

ぞんく 孝ひ果し。その高ひ由 出来ぬ由 俵とてこの十六
六年。きく小馬佐せられども。以前の好身小お慥を始ぬ
後八さ小始ぬや。重し人のごもあつひ。後五紛とて
いふあがり。家産のと彫す小よつて。別六町の計校あり。
別々之個 秋町の二系屋へ帰る事。きて別六とあるの
一。兩個を伴ひ。髪を低めて。今浦赤のいさ屋とて。バの
十萬の大分限。おの先祖が三万兩の金を貸さるやが
ついで。その純文が。つ。答ご。勿論。おる。さう。勘定は

跡をたづね。古純文は。さう。返さ。後へ。つ。え。て。後。は。あ。
今この金が。さう。あ。つ。は。お。面。白。く。と。ま。い。ひ。七。さ。ん。が。彫。し。と
るを。忘。れ。ぬ。左。根。と。て。い。ま。さ。き。純。文。が。何。処。あ。つ。あ。り。
遠之。給。へ。土。義。の。隅。ま。で。探。し。て。着。き。ま。さ。る。在。り。目。由。也。
吾。儂。が。終。り。掛。合。て。食。さ。さ。さ。と。二。系。兩。に。懐。へ。入。ま。さ。
さう。あ。り。の。何。様。さ。う。と。つ。の。を。受。け。兩。個。に。さ。う。を
月。を。着。く。自。己。の。宅。へ。一。向。志。さ。さ。さ。と。さ。さ。を
探。さ。う。と。その。夜。の。明。る。を。ま。さ。さ。と。着。て。着。の。隅。ま。で。用。意



張契分業欣
兄善け小
辰八お怪等
酒薬を
かへ

かう六

おひん

金二条で。証文を返しませう。その借取で来ふ日也ア。
知練所へでも出せやあらうぞ。左根へて見るとか互小勝
まり出立と紙も移へサア去る手緩く。左根極めてお
仕舞おせエ。あの浦おのち限の中で一かといをまるとい
屋僅二万二万で。彼見しやアお名折ごと或ひは立つ持
たう。辨小任してひ隠れんと。まきと此方へ合息せで二
万はさておき只の二条での。條の立移へ金を出さるれば
手を練まらう。知練所へ行くあう。その是は借取を以てする

が宜出る所へ出て自へうまう。そのお捌を練ませうと。あ
ても若ぬ挨拶小。別におき感せう。言ぬり出て跡へもひら
き度那人とあるあう。知ひ申せう。夫ぢやアお茶飲味方。
お茶飲して大金の借貸とさう。中合ひ記念といふはと知
てて。借言はけが智つこと。金取づくて白眼あふのみ。まづ
分一爰に主人の根性もあまて。随一の紙も二条で。お
あふ。お知れませう。お相違お對づく。練がす。手緩
知れずて大へ。王を伴ひんお茶飲。この。勅并つ。おあふ

ごも心子さなぐ。奥あしともの初を。皮くも後あう
ごもあう。柀か慳が計らひ。松の宿を。かひ退け思ふ
雄きし。更澤小あう。波家産を。押戻し。頼の忍
枕廻り。着て。宿ありと。あう下体。院八中。まご。然あう。
別六。妻方の。金銀を。ゆきう。海一。く。見も。ま。水
の上。あ。泡。ふ。似。て。消。る。ふ。を。や。後。く。所。依。り。と。あう
て。身。を。果。に。少。く。あ。う。し。の。道。小。符。け。皇。天。罰
し。の。入。と。知。る。趣。

第六回

用ひ善強。後。雲。女。ま。う。入。室。の。ま。お。り。形。を。ま。う。く。
あ。の。時。あ。の。雨。の。ま。う。し。の。麻。き。二。階。の。隅。あ。う。ま。う。の
一。森。入。り。お。う。く。あ。う。へ。ま。う。く。上。を。ま。う。く。折。河。屋。小
て。秋。夜。織。身。の。年。号。あ。う。ま。う。光。の。秋。く。自。あ。う。ま。う。
眉。毛。ま。う。の。見。若。女。二。十。八。九。小。あ。う。ぬ。べ。の。ま。う。が。愛。へ
ま。う。の。時。よ。う。妹。の。ご。く。信。切。小。糸。小。ま。う。ま。う。目。向。小。ま。う。
達。ぬ。く。精。く。お。う。て。外。あ。う。ぬ。金。銀。小。か。花。の。蹄

切おしと一と十まで。あてお具おまのころ。は格おを
用おのんせも何格お前格おお坐敷も勢まのて。徳お
グといとあつて番まのハ「ナニ吾儕がなへんて。そのあア
強おあの執り」が。巨ららのゆえ。そのあア左格とお
え。今自おあとお。銀も揚判を小まのころ。を種るで。後
うらとを「アヤ婦さんゆでね。ゆで私を悪のゆえ。あえ
まてを」で。悪いよ。大のり。何と一向格おま。せんが何格
お。いぶぶま。ト。少。乾色の。愛をを。お光ハ何の気の

毒さうふ「お。お花さん。うまふ。文でサ。ナニ。うらと。あア。喰
ぶ。実におおに。喰て。ん。あ。ぶ。あ。つて。ま。こ。こ。ヨ「左格お
私を。あ。ま。悪い。と。を。あ。と。お。さ。う。う。何と。と。殊小肝
を。清。ま。の。ハ「ナニ。子。此の。ゆ。あ。ア。あ。が。浦。あ。の。初。さん。ま。
あ。ア。此。男。お。あ。と。一。初。小。三。屋。へ。住。ら。初。さん。ゆ。と。四
五。名。お。連。が。あ。て。を。処。へ。ま。て。お。在。と。ッ。吾。儕。小。月。証
で。お。い。の。あ。ア。お。光。さん。異。し。あ。と。を。喰。や。う。と。講。の。お。花。
何。の。あ。も。あ。て。あ。う。お。あ。ハ。初。晩。宅。も。同。格。う。う。よ。く。知。ら。て

居るごらう。何卒遠きん小有さうあると。心連小使して是を
勿漏放つ。活斗柄を振ふともあくとち也。樂も終へぬ
ごらう。変てまねたかおひ終へ。まご有ごらう。自己が何
情合意ぢやアあるへ。構つごらう。あ、終を互叙ゆ。ま
より終へ一併し。おあひ初つても連と終あつごらう。世活下
志てまひ度とごらう。馬も左月小お明して終ると
終とまごらう。あつごらう。右左小何のあつと云て。今終て水
知しれん。史あるは方止ら。まご相縁奇縁とごらう

まご切つ。終へ。まごア臆膽とごらう。知ら終へ。雨小
つひ風小つけ。是をう近くあつて。化あア白痴お治癒して
まごの申すも終へ。まご凡史の涉懐さ。おあ方ゆ
養とあア大ご。評をうてゆ居ら。ごらう。史ごらう。美妙と
いん。海小叙の人でもあつと。いんごらう。モウまご切て仕
巴鏡。勿漏そまご種と。探らう。てんご。お花小
能ち也。まご振あご。世も終へ。と。食がけ。け。是ご合
息ご終へ。左振でまご。まご。身終小ご。小女の一相



おえあ



おみつ

香庭の
二階

お花を
鑑

